

# 少子化社会を考える懇談会 メンバー提出レポート

(第2回資料)

平成14年5月

少子化社会を考える懇談会

## 少子化社会を考える懇談会メンバー提出レポート（目次）

青木	紀久代	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授	1
安達	知子	東京女子医科大学医学部助教授	11
大越	将良	「男も女も育児時間を！連絡会」世話人	15
大日向	雅美	恵泉女学園大学教授	19
奥山	千鶴子	子育てNPO法人「びーのびーの」代表	22
柏女	霊峰	淑徳大学社会学部教授	28
熊坂	義裕	岩手県宮古市長	32
黒澤	昌子	明治学院大学経済学部助教授	43
玄田	有史	東京大学社会科学研究所助教授	48
小西	秀樹	学習院大学経済学部教授	50
酒井	順子	エッセイスト	52
残間	里江子	(株)キャンディッド代表取締役	56
清水	ちなみ	コラムニスト・「OL委員会」主宰	64
白石	克子	伊勢丹労働組合執行委員	73
津谷	典子	慶應義塾大学経済学部教授	81
松本	秀作	日本青年会議所会頭	88
水戸川	真由美	いいお産の日実行委員会事務局長 ・テレビ・ビデオ制作コーディネーター	94
山崎	泰彦	上智大学文学部教授	109
山田	昌弘	東京学芸大学教育学部助教授	111

## 第2回少子化社会を考える懇談会提出文書

お茶の水女子大学 青木紀久代

はじめに

事務局から提示されました、6つの論題にそって、ひとまず以下のように回答させていただきます。回答に当たって、第1回少子化社会を考える懇談会議事録記載の座長のご発言すなわち「何を幸せと思っているのか、根っこの部分、自身にとってその中での子育ての位置づけ、などを正直に述べてほしい」といった趣旨のコメントを念頭に置きました。

そのため臨床心理学的研究よりも、臨床心理士としての子育て支援経験、さらに個人的子育て体験というように、回答の基礎となる部分は、従来の公的な発言における私の思考形式とは概ね反対の方略をとってなされており、論旨の推敲も不十分な面が多く残っていることをご容赦ください。

### (1) 少子化の要因と今後の少子化への見通しについて

第一回にいただいたこれまでの関連資料を拝読し、沢山の綿密な計画に基づく社会調査が行われ、各界の方々から十分な討議なされてきたことを再確認いたしました。別の言い方をすると、この限りにおいて、批判すべきことは何も無く、また補足すべきことも見当たらないということです。

子どもが少なくなると、社会全体の生活がどのようなものになるのか、労働力、社会制度上の問題など、現実の日本に姿について国民にわかりやすく、情報をもっと共有する必要があるように思いました。社会のために子どもを生むべきだ、と直接当事者に責任を押し付けるようなことがあってはなりません、子どもを育てるということは、どういうことなのか、親となった人だけでなくもっと多くの人に関心を持って問い直してみるための土壌作りはぜひ必要だと思います。

次に、数値の上から見えて来る女性の晩婚化、初出産年齢の高齢化による第一次的要因は、これ以上晩婚化が進むとは考えにくいものの、急に低年齢化するとも思えません。なぜ結婚しないのか、それについては(3)の回答にゆずり、今後どんなかたちの結婚のありかたが増えるのか、また予想される子どものミクロな養育環境について想像してみましよう。

1 子どもを持たずに結婚生活を「試してみる」、だめならいわゆる「×いち」になる。そこまでなら、自分の人生に致命的な打撃は受けない、そう考える人たちが増えていくように思います。

2 一方で、子どもができてしまってから結婚する、結果的に結婚の決断を妊娠任せにするカップルも増えるものと思われます。

もちろんこのような考えの人が圧倒的大勢になるとは断言できませんが、1、2に共通する結婚のあり方は、「子育てについてはとりあえず、二者の間で検討されてこなかった夫婦」であり、離婚率の上昇、婚外出産の増加などと関連していくでしょう。

結果的に、「少ないけれど非常に大事にされる子ども」と、「親の心理的な準備期間が少ない」か、あるいは「出生すら望まれていない子ども」というような、心理・社会的養育環境の二極化が生じる恐れがあります。子どもと親の密着の問題と同時に、虐待の問題が増加しているのは、少ない子どもを大切にしようという社会の思いとは裏腹な現象です。

子どもを育てるということ以前に、誰かと非常に親密で濃厚な関係になること、そしてその関係が互いに尊重しあい、対等なものであることを長期にわたって維持すること自体が、若者たちに難しくなっているのではないのでしょうか。つまり、指しあたって人には迷惑をかけないで、好きなように生きることではできるけれども、人とかかわりあって、お互いにとって良いように生きる、ということとは、彼らにとってとても困難な課題であると思われます。

このような心理的な問題は、子どもを生む世代より少し前の思春期・青年期における様々な心の問題に共通して見られる特徴に通じているのです。

ですから、そもそも人と親密な関係を維持し、育てようとする動機が低い、ある意味で孤独な集団に対して、結婚や子どもを持つ選択をあくまで個人にゆだねるとすると、今子育てをしている世代をサポートする社会制度を整えても、それを主体的に利用しようとする人が、その後に増えるかどうかは、確信がもてません。

現在ある子育て環境整備の具体的な課題はどんどん推進していただいて、さらにこれから大人になる子どもたちにさかのぼって、苗を育てていかなければなりません。思春期前、つまり今小学生の子どもたちから、10年後に芽が出るような教育が大切だと思います。

(2) 子どもは親の所有物であるという意識(子どもは親のものという権利意

識と子育ては親がしなければならないという義務意識)がわが国では強いと言われているが、それについてどう考えるか。

例えば、乳幼児期の親子の心理療法に関して見識のあるスターン<sup>1</sup>は、先進国における母親に課される社会-文化的子育て責任について、およそ次のように、まとめています。

- ・ まず社会は、子どもが望まれて生まれ、幸せに発達することに大きな価値を置いている。

- ・ そして文化は、母性の役割を高く評価しており、母親は母性の役割に従事し、感動することで、人間として高く評価される部分がある。

- ・ 母親は子どもを愛すものであり、たとえ母親が子育ての多くを他者に任せるとしても、全責任は母親にあるとみなされやすい。

- ・ また子どもの出生の初期には、母親が母性の役割を果たせるように、父親その他の人々が援助体制を提供するだろうと期待されている。

- ・ しかしながら、家族も社会も文化も、新米の母親が母性の役割を一人でうまく達成しやすくなるような、経験・訓練ないしは適切なサポートは何ら提供していない

以上のことは、そっくり今の日本に当てはまる構図であろうと思われます。要するに社会は、幸せな子どもの成長をこよなく願っているけれども、子どもは各家庭の中で存分に育てられるのがよく、周りがとやかく口を出すものではない、と考えているのです。実際には、口も出さないし、お金も出さないというあり方です。

しかも良好な養育環境は、母親となる女性が、全て一人で提供できるかのような、根拠のはっきりしない幻想を持っており、社会の担うべき責任を放棄し

---

<sup>1</sup> D. N. スターン (著) 馬場禮子・青木紀久代 (訳) 『親-乳幼児心理療法-母性のコンステレーション-』 岩崎学術出版 2000 (Stern, D. N. 1995 *The motherhood constellation: A unified view of parent-infant psychotherapy.* New York: Basic Books.)

てきた、ないしは、気づいていなかったと言えます。

こうした中で、幼児の身体的・心理的虐待の問題、学校におけるいじめ、学級崩壊、未成年者の残虐極まりない犯罪など、子どもの未来に影を落とす事件が報道される度に、家庭における養育機能の低下が叫ばれるのです。狂った親たちが狂った子どもを育てていると言わんばかりの人たちも、人の子の親であり、同じ社会に生きる同類であるのに。

子どもが生まれてから、集団生活に入るまでの数年間（三つ子の魂百まで、というおそろしげなことわざも、この数年間に含まれている）は、子育てに最も多大なエネルギーがかかり、しかも親子関係に多くの混乱と危機が生じる可能性が高いのは周知のとおりです。子育ては、家族の裁量で行うもので、社会が細かなことまで強要する類のものではないとの認識が、ある面では、新米の母親と幼い子どもをカプセルのごとく家庭の中に押し込める結果を招いているのではないのでしょうか。

子育てに対する過剰な義務感、それをあおる土壤が社会にあったのだと考えます。子どもを私物化するのも、自分が育てた子どもを自由にして何が悪い、という、差し伸べられることのなかった社会の援助に対する裏返しともとれます。

いずれにしても、子育てを母親一人の養育能力に還元している限り、母親は社会に助けを求めることはないし、決して子どもを自分から手放すことはしないでしょ。それはきっと、学童期に入っても変わることはなく、かえって子どものことで、学校から家庭の問題、ひいては母親としての自分の落ち度を指摘されはしないかと、疑心暗鬼になりやすいのです。

少子化に関する審議会、懇談会では、もはやこういったことは自明であろうかと思いますが、あえてこのような問いが立てられ、今またこのような回答をすることに何某かの意味があることを祈ります。

(3) どうすれば、子どもを生み育てようとする気持ちになるのでしょうか。  
またその理由について

結婚を遅くする理由には、外的な制度の問題、この社会の住みにくさなど、常識で考えられるものはすべて妥当なものとして、当事者たちが認識しているものばかりです。

しかし、こういった問題が子どもを生まない選択に直結しているかどうかについて、一考を要するように思います。

大人でも生きるのが大変だった時代があります。その頃は、そもそも子どもの成長にとってより望ましい環境とは何かを議論する風潮など、ほとんど皆無

に近かったわけです。親のしてくれることをただ口を開けて待っているような生活とは全く違って、子どもは、早いうちから自立して、自力で生き残ってきました。しかし、不思議なことに親に恨みごとを言う人はあまり見かけません。戦中戦後を生き抜いた世代の人たちは、みんなで一生懸命生きてきた、そう実感されているのです。

大人になって親孝行してこそ人の道。立派になって、親に楽をさせてやりたい。皮肉なことに、どの時代も、どの国も、その社会が貧しくて、過酷な養育環境におかれている子どもほど、そんな風に思うのです。メディアを通して、他国の子どもたちが、毎日のようにそう言って未来を語っています。親は親で、何もしてやれないから、子どもを生まないと言っている人はいません。

しかし、今の私たちには、子どもに世話をしてもらおうという発想はない。沢山生めば、自分の家の働き手になるなどといったことは、ゆめゆめ思うことはありません。

何のために生むのか。これは、自由に生きることを保障された社会でこそその悩みです。外側の価値観で「子どもは尊いもの」と植え付けられても、身体の内側からほしいと思わなければ、他人事です。

自分が子どもといるイメージがいただけないと、この「子どもがほしい」ということが自分の中にわきあがってくる可能性は薄いでしょう。観念だけでなく実際に触れた事のあるものとの記憶は、私たちの情動的な行動を組織化する際に大きな働きをします。子どもに触れる機会が圧倒的に少ないもの同士の間で、子どもの話がでるわけがありません。自分の年齢・発達に応じた子どもの世話体験を身につけさせるのです。それは、子どもを生むまでの教育と、生んでから、またしばらくたって子どもに接する世代の教育を含みます。自分の子どもでなくても、様々な年齢層の子どもと接する機会を増やし、子育て環境の下地を作るのです。異年齢集団の交わりの中で、子どもの世話を学ぶわけです。

若い世代には、とかくおこりがちな同年齢集団だけの付き合い方の幅を広げることになります。学力重視型の教育構造の中で、思春期の子どもたちは、同年齢集団の中で生き延びるために、エネルギーを使いすぎています。地域ボランティアなどの活動促進事業が進んでいますが、学校から生徒をおくりこむことのほかに、大人世代の地域活動を進めることが重要です。そのためには、企業人が、自分の居住地になんらかのかかわりを持つ活動を奨励する風土を期待します。青年会の活動は、あらためて見直されるべきものだと思います。子どもが本当に喜ぶものは何か、子育てに優先しなければいけないものは何か、集団の中で学んでいくはずで、アンバランスなお金のかけ方を学びなおし、バランスの取れた子育て費用を見積もれるようになるでしょう。

子どもとの実際のかかわりがあつたうえで、子どものすばらしさを教えるこ

とがやはり根本的に大切です。

- (4) 政府は少子化の流れを変えるため、男女協同参画社会の実現や少子化対策を講じ、また、各界の方々からなる国民会議を開き、子育てにやさしい環境整備を求めています。これまでの取り組みに対する問題点やその理由について

何らかの関連サービスに関する利用率や、予算の投入実績などのほかに、一連の取り組みの詳細が、個人にどう伝わっているのか？これまでの政策を国民がどう理解しているのか？これを出生率という指標に限定せず広い角度で調べてみるのが、重要だと考えます。

従来の心理学全般の研究にも言えることですが、一つの心理的な問題の要因と考えられる沢山の変数を想定し、その中に、社会経済的変数を投入しパス解析などを行って、要因間の関係を探って行きます。そうすると、住宅状況や収入、子育てサポートの有無といった強力な変数が子どもを生む選択にダイレクトに影響するようなベクトルが引かれたりします。しかし当事者に詳しく話を聞くと、必ずしもそう単純なものではないことがわかります。実は、彼らはそういう相関図を冷ややかに見ているのです。マクロな理解が、相対的にミクロな個人の行動に十分適用できるようにするためには、これらの諸変数をつなぐために妥当な心理的な変数を仮定することが必要であろうと思われれます。つまり個々の現実を、当事者がどのように組織立てて理解しているのか、もっと平たく言うと主観的にどのように体験しているのか、これについてデータの妥当な解釈を繰り返し練り上げることが求められます。

今後は、マクロな社会制度の改革と、個人の意識改革の両面からのアプローチがなされることに加えて、この次元の異なるものを統合するための「つなぎ」の作業を念入りにすることが重要と思われれます。「つなぎのプロ」が必要なのではないのでしょうか。

例えば、子育て支援センターができて、運営のためにもっとも必要な人件費が不足しています。私立保育園では、ぎりぎりのマンパワーで日々の保育が動いていますから、地域の子育て支援のプログラムを充実させるほどの、人手が十分ではないのです。

理念もわかるし、建物も立ったけれども、動かし手がないという事態が生じています。子育ての現場は、経験不足の「素人」の親たちと専門家と両極端な担い手の構成になっていく恐れがあり、これは結局のところ親たちの主体性を奪うことになるでしょう。

あたりまえのことですが、相手がどういう理解の枠組みを持っているのか、

できる限り詳しく把握して、相手にわかるように伝える、伝わっているかどうか確かめる、そういう作業を担える人をきちんと配備することです。

(5) 国において、民間において、地域において行う少子化対策について

いろいろと瑣末なことも含めて、とりあえず、ご提案いたします。

**・子どもと触れ合って育つ**： 基本的に異年齢間の交流を柱に、学校、地域の生涯学習のカリキュラムを作成する。交流は、不特定の場合当たりの接触体験ではなく、ある程度担当制をとって、かかわりに責任を持たせつつ、特定の子どもと一定期間関係が育つように行う。

(学内カリキュラムの一例)いわゆる幼小連携につながることであるが、新入生を高学年が少人数のグループを組み、新入生の生活をサポートする。高学年は年少の子どもとのかかわりの工夫について学ぶ。

(中学生・高校生の保育体験の促進)地域の保育園に限らず、児童館、学童保育などに、継続したかかわりを持つ。土曜日などを利用して、月に一度でもよい。子どもとのかかわりや、担当した子どもの成長をレポートする。子育てのコツを両親や目上の経験者からインタビューしてくるのも良い。つまり年下の世話をしながら、目上の人に世話にもなるという関わりの構造を維持する。

(子ども会・青年会・長寿会?)地域の交流の軸となる活動力の再活性化。会社の所属以外に必ず一つは地域の活動に参加することを奨励する。(独身の青年も子どもの活動に継続参加すると自然と子どもが身近に感じられている!)。すでにこのようなシステムが崩壊している地域も多いと思われるが、新生、再興の援助は惜しまずしてほしいものである。親にとっては、自分の子ども以外の子どもに触れる機会を増やす。子どもにとっては、親・教師以外の人とかかわる機会を増やす。

(大学生の保育訓練)一部の保育学科や発達心理学専攻の学生に限らず、また男子学生も教養科目に保育を取り上げ、実習機会を増やす。女子大との単位互換に含めてはどうか。

(海外援助)外国の子どもたちの援助を通して、養育性を育てる機会が得られる。一部の人たちだけがグローバルな活動を展開するだけでなく、企業や、自治体がバックアップして、地域に根付いた支援を促進する。

**・学びながら育てる**： 自分の進路を決めながら、結婚生活が送れるためのサポートを実現する。まじめに学生生活を送っている人は、お金がなくても子育てができるように、学費援助、夫婦寮、保育施設を国立大学が率先して整備

する。(自活して大学生を送る学生よりも、親のすねをかじって、遊び回る学生がまだまだ多いのですから、いい成績を取めて子どもも育てている同級生がいたとすれば、同世代の生き方としていい刺激になるはず)。

生涯学習の場が、大学にもっと広がれば、時間的にゆとりのある、本来養育能力の高い層の中・高年齢の方々とのネットワークを組織することも可能である。(ぜひ試験的に大学で実践してみたいプロジェクト！)

学生だと、保育所に入所する順位が低い、保育所の絶対数を確保するとともに、ぜひ門戸を広げてほしい。都市部の学生の預け先は絶望的状况である。

**・働きながら育てる：** 勤め人以外は、あまり関係ない話なのかもしれないが、育児休暇・看病のための休暇・フレックス制度、共働きが前提の労働環境を一層推進していく。子どもの夏期休暇などの時期は、できるだけ長期休暇を制度化する。最低 2 週間。夫婦ですらして休みを取れば、家族旅行以外にも、子どもが安心して休暇を過ごせる。学童期から中学校の部活動が始まるまでの数年間が実は一番働く親たちの悩みが強い。鍵を渡せば、一人で待てるが、一番さびしい時期ではないか。親が帰るまで一人で留守番という子どもは多く、塾より他に行き場がない。非行に向かう芽もある。最も強く地域のシステムが作動してほしい年齢と言える。

さらに、中学になると家族旅行もままならない。親たちが忙しい中、子育てをしていて良かったと感じられる貴重な休みは、オムツが取れてから学童期まで。青年期になって、家族のいい思い出として一番多くあがるのが、この家族旅行の思い出である。子どもが生まれたときにもらえるご祝儀より、休みの制度化の方がありがたいと感じるであろう。子育ては長期戦であるから、節目ごとに、ささやかなごほうび？を贈りたいものである。

(保育所)通勤途中の地域でも、入園を許可できないだろうか？いずれにしても、絶対数は足りないまま。

**・育てたことを伝える：** 子育てのベテラン世代はもちろん、新米の親たちにこそ、これから子どもを持つと思う夫婦に、乳児期の子育てについてアドバイスをしたり、地域の子どもたちとの交流に一役買ったもらう場を作してほしい。新興の住宅地などでは、新米の母親と子どものペアが小集団を作って交流しているが、その集団だけで孤立し、かえってそこから抜けることができないことでの閉塞感が問題になることもある。等質性の高い小さな集団の中で自分を押し殺して生きるという、思春期にかつて経験した適応パターンが、子連れで繰り返される危険がある。自信のない母親の主体性を回復するには、非援助者の役割に固定されることなく、自分の経験が他者に生かされていると感

じることが一番である。ぜひ、夫婦単位の構成で行える企画が多くなされることを希望する。

**・モデルを提示する：** それにしても、なぜメディアは恋が成就するところまでをテーマにするドラマばかりなのか。若者にとっては、中年期の不倫も、子育ても同じように未知の世界なのだから、偏ったものばかり情報過多という感がある。

ジェンダーフリーのドラマや、家族をテーマにしたものも確かにあるが、モデル提示にもっとも貢献するのは、やはり大衆向けドラマではないか。少年の話をもっと描いたらよい。まったくの赤ん坊でなくてよく、青年たちがほんの少し前にもっている自分史の中で、子どもが大人になる過程で親たちも試行錯誤しながら子どもと付き合っただけ成長している様子を横から眺めてみる機会、子どもの面白さに共鳴する機会が重要なのである。

(6) その他ご自由をお願いします。(これは全くの蛇足ですが、自由にといいるところから、最近の経験の連想です。)

少し前、朝日新聞の少子化特集記事の中で、某政治家のインタビュー記事があり、少子化は、男に魅力のなくなったせいで起こっている。しっかりすべきことをしろ、といった内容が記載されていました。このご時世にああいったことをはばかりなく答えている様子に、あきれてものが言えませんでした。(私の周囲の人たちも、実に冷ややかにあの記事を読まれていました)

しかし、こういった考え方は、一定の財力や権力の獲得に成功した男性に温存される危険があるのだとも再認識しました。子どもをどう育てるかといったことは、まるで未経験、家でも社会でも、権威的にすれば仕事を果たしたと思っている、そういう偏った人間の価値観がまる出しの記事でした。そして万が一この方が少子化政策に携わった場合の行く末をふと忘れてしまったのです。

成果の見えやすい、大きな事業や改革をしていくための視点や手腕は、沢山の政治家の先生方が示してくださいました。けれども、これまで戦後の長い年月をかけて作られてきた社会の中で生き抜いてきた一人一人の「適応」の集積として見えてくる、子どもを生まない選択にどう対処するかといった問題には、じっくりと人を育てる目が必要不可欠ではないでしょうか。つまりは、耳を傾けること、対話しながら見えてくることを大切にしようとするところから始まり、現状の子育て環境を整備しながら、少し先の希望ある未来を、今子どもとして生きる世代に語り、描きあってみる営みを実践することです。

このようなことは政策成果にならないかもしれませんが、何を考えているの